

若年不安定就労者の関係形成

——ある若者就業支援施設を介した自発的な集まりの事例から——

仁井田 典子

本稿では、これまでほとんど焦点をあてられなかった、親に経済的に依存しつつも家族以外の社会関係に乏しい若年不安定就労者たちの経験的世界を明らかにする。そのために、若者就業支援施設を介して形成された若年男性たちの自発的な集まりを事例として、その特性についてみていく。成員のひとりとして処遇されるような集団を持たない彼らは、その集まりにおいて自身が排除されないようにするために、特定の成員を排除しないための処遇を規範化している。そして彼らは、この正規雇用には就いていない人の集まりにおいて、他のメンバーたちとの差異をみいだすことで、ようやく自己を確保しようとする。けれども、彼らにとってそれは、施設の閉鎖とともに手放してしまうような一時的なものでもある。彼らは、そのような制度に依存した仮初めで脆弱な集まりをつくりあげながら、「不安定就労」の状態における自己の保存・維持を試みているのである。

1 問題設定

『平成3年版労働白書』で「フリーター」が定義されて以降、非正規雇用や無職の若年者たちは「フリーター」「ニート」として扱われ、社会問題化されてきた。政策提言や政策を施行する立場の人たちを中心に、彼らは就業意欲や就業能力、就業機会が足りないために正規雇用には就いていない者たちとされ、ひとつの統計的集団として把握するアプローチが支配的であった（日本労働研究機構 2000; 小杉 2003）。その一方で、それらとは異なり、彼らの持つ社会関係に注目する研究もみられる。そうした研究によれば、非正規雇用や無職の若年者たちが、不安定就労問題にかかわる社会運動団体や支援団体、地元、出身校、職場、趣味活動を通じた社会関係を形成しており、それが困難を生き抜く上で意味を持つことを明らかにしている（乾編 2006; 新谷 2007; 神野 2009; 戸室 2009; 橋

口 2011）。

しかしながら、若年不安定就労者たち全体の規模からすれば、社会運動に参加する人たちはごく少数である。また、彼らのなかには交友関係に乏しい者たちも少なからず存在するものと推定される。さらには、家族をも含むすべての社会関係からの断絶により、生活保護を受給しながら生活する人たちの存在も指摘されている（湯浅 2007; 飯島 2011）。けれども、そうした状態に至る前の、家族に依存しつつ不安定就労の状態にある人々が、生活保護を受ける人たち以上にボリュームをもって存在しているものと考えられる。すなわち、若年不安定就労者のなかには、交友関係に乏しいながらも親の収入を頼りに生活する者たちが、相当数存在するものと推測されるのである。そうした若年不安定就労者たちは、これまで「パラサイト・シングル」として一括りにされてきた。「パラサイト・シングル」とは、親と同居し続ける若年者たちの

生活形態に着目してつくられたカテゴリーであり、「学卒後もなお、親と同居し、基礎的生活条件を親に依存している未婚者」を指す（山田1999）。だが、彼らが家族に経済的に依存して生活していることを除いて、彼らがどのような経験的世界を生きているのかについては、充分には焦点が当てられてこなかった¹。そこで本稿では、若年不安定就労者たちのなかで、家族に経済的に依存して生活し、そのほかの社会関係に乏しい人たちの経験的世界を明らかにすることを試みる。

こうした若年不安定就労者たちの事例として、若者就業支援施設に長期間にわたって通い続ける男性たちが形成する自発的な集まり（以下「集まり」とする）をとりあげる²。若者就業支援施設とは、若年者の就業支援のために行政によって全国に設置されたもので、一般に「ジョブカフェ」「ヤングジョブスポット」「地域サポートステーション」などとよばれている。ここでは、15歳から30歳代後半まで³の若年者たちを対象として、正規雇用に就かせるための包括的な支援が実施されている⁴。施設の利用者の半数以上は男性であり、長期間通い続ける利用者もほとんどが男性である。こうした男性への偏りは、「男性稼ぎ手モデル」の影響や、これまでの「若年不安定就労問題」において男性が主な対象とされてきたことにより⁵、非正規雇用や無職の男性若年者たちが、同様の女性たち以上に社会的に否定されやすい状況におかれているためだと言えよう（本田2002; 山根2005）。また、こうした施設では、利用者同士の交流やそこを介して形成される自発的な集団の形成がみられる（社会経済生産性本部編2008）。

本稿の構成は以下の通りである。次節では、調査対象と方法について述べる。3節では、「集

まり」においてどのような規範がみられるのか、なぜそのように秩序づけられているのかについて明らかにする。4節では、「集まり」のメンバーたちが、どのような目的のためにその「集まり」に集まっているのかについて明らかにする。5節では、「集まり」の脆弱性についてふれ、最後の6節で全体をまとめる。

2 調査対象と方法

2-1 調査対象

2-1-1 「チャット」を介した自発的な集まり

本稿の調査の対象となった若者就業支援施設は、2005年4月から2008年3月まで、東京都区内の主要なターミナル駅から徒歩5分ほどの場所に設置されていたものである。同じ建物内には、若年者を対象とした公共職業安定所が併設されていた⁶。この就業支援施設は調査当時、1日に50～100人程度の若年者が利用していた。施設内は、個別の職業相談コーナーのほか、様々な職業を紹介するビデオや本、アルバイト情報誌などが置かれた棚、自由にインターネットを利用できるパソコンコーナー、イベント開催スペースにより構成されていた。ここで行われている就業支援は、利用者個人に対して行われる「個別相談」と、一度に10～20人の参加者を対象として行われる「イベント」の2つに大別された。個別相談は、利用者個人に対して行われるため、利用者同士の交流はほとんどみられなかった。他方、10～20人を対象として行われるイベントでは、利用者同士の交流が頻繁にみられた。特に「チャット広場」（以下「チャット」とする）とよばれるイベントは、この施設で開催されるものなかで唯一人数制限や事前予約が必要ないこと

表1 「集まり」のメンバーたちの属性

	年齢	学歴	生活形態	就業経験	現在の就業	志望職種	通い始めた時期
A	27	専門学校	親と同居	日雇い派遣 アルバイト	なし	不明	2005年4月
B	31	四年制大学	親と同居	正規雇用 アルバイト	なし	事務	2006年8月
C	26	四年制大学	単身	正規雇用 アルバイト	なし	事務	2005年10月
D	31	高等学校	親と同居	アルバイト	アルバイト	不明	2005年11月 2006年8月
E	29	高等学校	親と同居	試用雇用 アルバイト	なし	営業 接客	2005年4月
F	24	四年制大学	親と同居	不明	なし	事務	2006年7月

から、長期間参加し続ける者が多く、参加者同士の交流もさかんであった。

「チャット」は、毎週水曜日の15時から17時に開催され、5人から15人程度の参加者たちに加え、運営スタッフ3名が毎回交代で1名ずつ参加していた。その参加者の多くは男性で、女性はごく少数であった⁷。この施設の約半分の面積を占めるイベント会場において、全員でひとつの話題を共有して意見を述べ合う。特定の参加者が、自分の抱える悩みごとや求職活動などについて話し、それに対して他の参加者たちが、自分のおかれている状況やこれまでの経験にもとづいて自分の意見を述べるといったやりとりがなされる。

「チャット」が何度か開催されるうちに、そこに集まる参加者たちは、終わったあと毎回のよう施設から徒歩数分のところにある喫茶店に移動し、集団を形成するようになっていった。こうした「集まり」においては、「チャット」でなされたやりとりに対する感想や、新しい参加者の特徴、最近観た映画やスポーツ、漫画の話題などについて話される。他方で、そこで彼らが自分の抱える悩みごとや求職活動などについて話すことは、まったくと言ってよいほどな

い。また、彼らは個別に連絡をとって「チャット」のない日に喫茶店や施設以外の場所にでかけることがあり、「集まり」ではそのことがよく話題にのぼる。

2-1-2 「集まり」のメンバーたちの特徴

「集まり」に継続的に参加するメンバーたちの、調査時における属性については、表1の通りである^{8,9}。

「チャット」に通っていた当時、彼らは就業していないか非正規雇用であった。Cさん以外のメンバーは親と同居しており、Cさんは親からの仕送りを受けて生活している。このことから推察されるように、彼らはみな、現在自らが就業していなくても、当面は経済的に逼迫しているわけではなかった。しかしながら、彼らは家族との関係が良好であるとは言えないようである。Aさんは一緒に暮らす家族について、普段挨拶することはなく「一番近くにいる他人」だと語る。Bさんは、有名大学卒の父親からは「(Bさんの)大学名をはずかしくて人に言えない」、公務員として働く母親からも「定職に就いていないので世間体が悪い」と日々な

じられていると話す。そのほかのメンバーたちからも、親とのあいだに何らかのわだかまりがあることをうかがわせるような語りが聞かれた。また、「集まり」でのやりとりから、彼らの交友関係は、「チャット」や「集まり」を通じたもののほかにほとんどないことがうかがえる。Aさんは、自分には親しい友人や交友関係は「まったくない」と話す。Cさんは、「定職に就いていない悩みを学生時代の友人には話せないので、『集まり』で話したい」と語る。そんな彼らは、「集まり」への参加に相当の労力を注いでいる。B・E・Fさんは、この施設から電車で1時間以上かかる場所に住んでいるにもかかわらず継続して参加している。そして、A・C・Dさんも、この施設まで電車で30分程度かけて通っていたのである。

こうした共通点がみられる一方で、彼らの年齢や最終学歴、これまでの就業経験や「チャット」に通い始めた時期といった属性については差異がみられる。しかし、後に述べるように、これらの属性にもとづく上下関係はほとんどみられない。また、居住地や出身校、志望職種なども共通しておらず、それらの事柄について話題が共有されることもない。つまり彼らは、非正規雇用もしくは無職の若年者たちのなかでも、経済的側面では親の収入に生活が支えられているものの、親との関係が良好ではなく、そのほかの人づきあいもほとんどないなかで、1年以上にわたって「チャット」や「集まり」に継続的に参加している人たちである。

2-2 調査の方法

本稿では、A・C・Eさんへのインタビューデータのほか、この施設が開設されていた2005年4月から2008年3月までの「チャット」や「集まり」での参与観察の記録と、2005年4月か

ら今日に至るまでに彼らとでかけた際の参与観察の記録をデータとして用いる。

筆者は2005年4月にこの施設を訪れ、運営スタッフに「『フリーター』とよばれる若年者たちについての調査研究を行っており、彼らに直接インタビューをしたい」と申し出た。「『チャット』で会った参加者と、個人的に連絡先を交換してインタビューを行うのなら問題ない」との回答が得られたので、その様子を見学して参加者たちと連絡先を交換した。後日、連絡先を交換したAさんに連絡をとり、2005年7月15日にインタビューに応じてもらった。また、Aさんと同様にEさんにも、2005年8月13日にインタビューをお願いした¹⁰。その後もAさんとはメールなどでやりとりを続け、2006年7月から参加者として「チャット」に定期的に参加するようになった。Cさんとはそこで知り合い、2006年10月29日にインタビューをお願いした。これらA・C・Eさんへのインタビューでは、彼らのライフヒストリーを自由な形式で語ってもらった。さらに「チャット」や「集まり」での交流やその参加者たちの関係性について情報を集めるために、この施設が開館したときから「チャット」や「集まり」にはほぼ毎回参加しているAさんに、これまでどのようなやりとりがあったか、どのような人たちが参加してきたかについて話してもらった。このインタビューは2007年8月13日に行った。インタビューに応じてもらったA・C・Eさんに対しては、筆者が「フリーター」とよばれる若年者についての調査研究を行っている大学院生であると説明し、インタビューの会話を調査データとして使用することについての了承を得ている。BさんとDさんに対しては、インタビュー調査を行っていない。後に引用するBさんとDさんのやりとりは、あくまでも参与観

察の記録にもとづいたものである。

3 「集まり」の規範——「きつい」ことは言わない

若者就業支援施設は、若年者たちの就業を目的としたものであり、「集まり」は、そこを介して形成された若年者たちの集団である。彼らはこの集いにおいて、自分の悩みや求職活動について話すことはほとんどない。けれども、そこに参加し始めたばかりのメンバーなどが、求職活動についての話をはじめることがある。そうした場合、「集まり」での会話は、慎重にそうした話題から逸れる方向へ向かう。

D:俺は今のところ、腰を治してワーホリ（ワーキングホリデー）行きたいからさ、就職しようとは思ってないんだよね。

B: Dさんがそんなことを言えんのは、親が不動産もってるとか、お金の余裕があるからだよ。(中略) Dさんから連絡があるときは、いつも遊びの計画ばかり。そうじゃなくて、せっかく知り合って友達になったんだから、就職に役立つことしないと。今度、合同説明会、いつあるか調べとくから、他の人も誘って一緒に行こうよ。

「チャット」の参加者: たいくつじゃない？
(BさんとDさん以外はまったく話さないまま、数十分間経過する)

(Dさんとその場にいた他の参加者が、遊びに行く計画を立て始める。)

(それと同時に、筆者とは異なるその場にいたもうひとりの参加者が、Bさんと別の若者就業支援施設に一緒にでかけるという話をし始める。)

B: ○○(別の若者就業支援施設)にいつ行

こうか？

ここでは、ワーキングホリデーへの参加を希望しているのだと話すDさんに、Bさんは親に経済的に依存していると批判し求職活動に誘っている。それに対し、BさんとDさん以外のその場にいた「チャット」の参加者たちが、それぞれの意見に同調するかたちでその場は終息した。

このように、正規雇用に就いた経験のない他の参加者に対して忠告や助言を行おうとするBさんの言動は、彼が「チャット」に通い始めた頃に度々みられ、他のメンバーたちから嫌悪された。Aさんは、こうしたBさんの言動が「きつく」聞こえるため「チャット」の参加者のなかで「嫌」だと感じている人が「結構多い」のではないかと話す。Cさんは、「あえて、社会の厳しさを他の参加者に教えてやろう」としているのかもしれないけれど、「人の痛みがわからない」ために、そうした言動をとってしまうのではないかと語る。またFさんは、「Bさんと話すのはもう嫌だ」と呟いていた。先にとりあげたやりとりの中でDさんを求職活動に誘っていたBさんは、そのあと次第にほかの「集まり」のメンバーたちに同化していき、「集まり」で求職活動について口にしたり、「チャット」で求職活動についてのアドバイスをしたりすることはなくなっていった。それとともに、Bさんはメンバーたちを誘ってファミリーレストランでの会食を自ら企画するといったように、「集まり」に強くコミットメントするようになっていく。このように「集まり」においては、それぞれの悩みや求職活動についての忠告や助言を忌避させるような規範が働いているのである¹¹。

上述のように、彼らは、特定のメンバーにつ

いて否定的な発言をすることがままある。しかしながら、彼らが本人の面前でそれを口にすることはない。A・C・FさんがそれぞれBさんを非難していたのは、いずれもBさんがいない場面である。また、こうした特定のメンバーに対する否定的な発言は、2、3人でいるときにみられる。実際にA・C・Fさんがそうした発言をしていたのは、筆者がA・Cさんそれぞれにインタビューをしているときや、Fさんを含め2、3人で喫茶店へ移動しているときであった。

そうした否定的な発言と同様に、最終学歴についての話題は、2、3人でいるときに話されることはあるものの、学歴が異なるメンバーがいるときには避けられる傾向にある。有名大学卒のCさんは、「集まり」で最終学歴について話題にならないように気を使うことは「一般的な礼儀」だと語る。「集まり」において、四年制大学卒のメンバーたちが大学に関する話をすることは、高卒であるDさんやEさん、専門学校修了であるAさんたちとは「異なる」存在として自分を位置づけ、A・D・Eさんを排除してしまう可能性が生じる。またそれとは逆に、四年制大学卒のB・C・Fさんが排除の対象となる場合も考えられる。そうすると、彼らは自分自身がそこから排除されてしまいかねない。そのため「集まり」では、特定のメンバーを排除してしまう可能性のある話題を話さないようにし、2、3人でいるときに限定して話すよう秩序づけられていたのである。

これまでみてきたように、「集まり」では、求職活動に関する話題を積極的に避けること、特定のメンバーを排除してしまう可能性のある話題を話さないようにすることが規範化されている。それではなぜ「集まり」ではこうした規範が存在するのか。それは、彼らが属性の差異

による序列化を回避し、特定のメンバーを排除しないように配慮し合うことで、自分自身がそこから排除されないようにするためだと考えられる。まず、彼らは正規雇用に就いていないことによって社会的な非難に晒されてきていることから、「集まり」にはそうした価値観を持ちこまないようにするために、求職活動にかかわる話題にふれないようにしているのである。また、彼らが「集まり」で最終学歴の話題についてふれないのも同様の理由による。様々な最終学歴を持つ人たちの集まりにおいて彼らは、大学に関する話題にふれないようにすることで、自分自身が排除されないようにしているのである。彼らが互いを「〇〇（名字）さん」と呼び合っていることから、属性の差異による序列化を意図的に避けていることがうかがえる。このように「集まり」において、特定の成員を排除しないようにするための規範が働いているのは、彼らがこれまで様々な集団において排除されてきた者たちであり、彼らにとって成員のひとりとして処遇される集団が他に存在しないためであると考えられる。

4 「私」の確保——親密ではないけれど一緒にいる

繰り返し述べるように、「集まり」において彼らは、自分の悩みや求職活動について語ることを積極的に避けようとする。にもかかわらず、この施設に通い始めたころのCさんは、正規雇用に就いていないことによる自らの悩みを、定職に就いている出身大学の友人には「話しにくい」ので「ここで話したい」と語った。この語りを言葉通りに受けとれば、彼は正規雇用の仕事に就いていないことを悩んでいて、同様の状況におかれている他のメンバーたちに対

しては、自分の悩みごとを話すことができるということになる。けれども「集まり」で話される話題は、就業や求職活動とはまったく関係のないものが大半を占める。「定職に就いていない悩みを話すことができる」と語るCさんは、自分が抱えている悩みを他のメンバーたちに語ることはまったくといってよいほどないまま、そこに継続的に参加し続けていた。

その一方で、彼らはしきりにいつもの喫茶店以外の場所に集まったり、「チャット」のない日にでかけたりする。たとえばDさんは、「チャット」で知り合った人と積極的に連絡先を交換して連絡をとり、フリーマーケットの出店、ファミリーレストランでの会食、カラオケなどにでかける計画を立てる。Dさんの計画に毎回のように参加しているのはBさんである。またEさんは、A・B・C・Dさんそれぞれに誘われてでかけたことを、「集まり」で度々話題にする。そして、「集まり」では、連れ立ってでかけていく者同士は「より親しい関係にあるもの」として認識されるようになっていく。けれども、一緒にでかけた者たちは、一般的な意味において親密な関係にあるわけではない。BさんとEさんは、何度か共にでかけたことのある間柄ではあるものの、個別に話すことはほとんどない。また、EさんはBさんについて「あまり好きではない」とさえ語る。Eさんを何度か誘ってでかけたことのあるCさんが、Eさんと個別に連絡をとるのは、「出かけるときだけ」と話していた。

このように、「集まり」において彼らは、自分の悩みや求職活動について語ることはほとんどないものの、親密ではないにもかかわらずしきりに連れ立ってでかけようとするのである。このことから、彼らが「集まり」に求めているのは、自分の悩みや求職活動についての相談相

手ではなく、自分と同様に定職に就いていないという否定的境遇にある他者の存在なのだといえる。

しかし、彼らは「集まり」のメンバーであり、自分と同様に正規雇用には就いていない他者である他のメンバーたちの存在を必要とする一方で、自分自身を彼らとは「異なる」存在として意味づけようとする。たとえばCさんは、「集まり」のメンバーたちを「あの人たち」と表現し、「ノリがよくない」「うだうだ」「(喫茶店で) だべってるだけ」だと語る。こうした発言をするのはCさんだけではない。Cさん以外のメンバーたちも、自分は「集まり」のメンバーのひとりであるにもかかわらず、他のメンバーたちを「あの人たち」と呼んでいるのをよく耳にした。また、彼らはしばしば、就業や求職活動とかかわりのないことについて自分と他のメンバーを比較し、その本人のいない場面で否定的な発言をすることで、自身を肯定しようとする。たとえば、有名大学卒のCさんは、「高卒とかの人ってさあ、大学行かないと就職に困るとかって考えなかったのかな。将来に対する考えがなさ過ぎると思うよ」と筆者に語った。「自分は音楽や語学に精通している」と普段から筆者に話していたAさんも、Cさんについて「あの人、自称音楽好きじゃん？ 大学でバンドやってたとかっていうし。でも、話してみると、全然詳しくないんだよね」「Cさんフランス語ができるっていうけど、フランス語で『星の王子様』が読めるくらいで、フランス語ができるってよくいえるなって思うよ」と筆者に何度も語った。

正規雇用には就いていないという同じ境遇にある人たちの「集まり」において彼らは、他のメンバーたちとの差異をみいだすことが可能となる。このようにして彼らは、「集まり」という場に身を置くことによって、ようやく自己を保

存し維持することが可能となるのである¹²。

5 「集まり」の脆弱性

5-1 制度からの自律

「集まり」では、参加者たちの悩みや求職活動について意図的に話さないような規範が働いているものの、「チャット」では、運営スタッフ3名¹³が毎回交代で1人ずつ加わり、参加者のひとりが自らの悩みや求職活動について相談し、それに対して他の参加者たちが自らの経験をもとに話すというやりとりがなされる。しかし、「チャット」が何度も開催されていくにつれて次第に、「集まり」のメンバーたちが参加者の大半を占めるようになる。それにより、「集まり」と同様に「チャット」でも、自らの悩みや求職活動について話されなくなっていく。つまり、運営スタッフの進行を無視して、自らが抱える悩みごとや求職活動とはかかわりのない単なる雑談が繰り返されるようになる。また、「集まり」のメンバーたちを中心に、17時の終了時刻直前から「チャット」に参加し始める者や、休憩時間や終了後に参加者たちの輪に加わる者の姿がしばしばみられるようになった。

そうした状況に対して運営スタッフたちは、話し合う話題の内容をあらかじめ決めようとしていたり、途中参加を禁じるような決まりをつくらうとしたりする。しかしながら、参加者たちはそうした運営スタッフの提案に協力していきとはしない。むしろ彼らは、「テーマを決めるのは嫌だ」といったAさんの意見や、「チャットは気軽に來れるのがいいところなのに、気軽に來れなくなる」といったFさんの意見に同調する立場をとる。そうした彼らの態度に対し、運営スタッフたちは「自分勝手すぎる」と反論

しつつも、スタッフたちによって新たにつくられた決まりごとは、結局なし崩し的になくなっていく。こうした「集まり」のメンバーたちと運営スタッフたちとの攻防は、何度となく繰り返された。

しかしながら、「集まり」のメンバーたちと運営スタッフたちとは、決して反目し合っているわけではない。「チャット」は運営スタッフたちが自分たちで独自に企画して立ち上げたイベントであり、運営スタッフたちは「チャット」に特別な思い入れを持っていた¹⁴。また、運営スタッフたちがAさんやEさんのように長く参加し続けているメンバーに「今後どのように『チャット』を運営していったらよいか」と相談を持ちかけ、彼らとその相談に応じることもある。だが、運営スタッフたちが一方的につくった決まりごとに彼らが賛同することはないのである。このように、制度を介して自発的に形成された「集まり」は、次第に制度的につくられた「チャット」から自律したものとなっていたのである。

5-2 制度への依存

「集まり」が制度的な「チャット」から自律していくからといって、彼らにとって「チャット」が無用なものとなったわけではない。「チャット」は毎週水曜日にほぼ欠かさず開催されてきたが、2006年12月から2007年3月にかけて、水曜日であるにもかかわらず、開催されない日がみられた。「集まり」のメンバーたちが運営スタッフにその理由をたずねると、「今月は水曜日が5日あるから1回休み」であるとか、「他のイベントが入ったのでお休み」といった答えがかえってきたという。参加者たちはそうした説明に対して納得できない様子で、「何でなんだろうね」といった疑問とともに彼

らのあいだでそのことが頻繁に話題にのぼり、ついには「チャット」がなくなるといった噂がながれるようになる。こうした噂話は、この施設を設置する行政の関係者が見学に訪れたことにより、彼らにとってさらに「現実味のあるもの」としてとらえられるようになっていった。結局、この時期に「チャット」が実際になくなるということではなく、根拠のない単なる噂話に過ぎなかった。しかし、彼らがこのように「チャット」がなくなることをしきりに話題にし、そうした噂が流れるに至ったことは、彼らがいかに「チャット」を必要としていたかということの意味していると考えられる。

その後、この施設は2008年3月に閉館した。それとともに、「集まり」のメンバーたち同士の交流は次第に減少していき、2008年11月にBさんの誘いによりファミリーレストランで集まったのを最後に、彼らが集う機会は途絶えた。Aさんはこの施設が閉館してから半年くらいのあいだ、EさんやFさんと連絡をとっていたが、次第に連絡をとることはなくなっていた。Bさんはこの施設がなくなった後も、他の施設に通って「集まり」と同様の集団に参加し、アルバイトをしながら求職活動を続けているようであったが、その後連絡が途絶えた。かつて「チャット」の参加者だった男性は、Cさんとその後も連絡をとり続け、Cさんの主催する飲み会に月に1度の割合で参加していたが、結局1年くらいで連絡が途絶えたという。Eさんは、Bさんの呼びかけによりファミリーレストランで集まった後もAさんと数回でかけたが、その後Aさんとの連絡も途絶えた。DさんとFさんには、この施設が閉館して以降、筆者は一度も会っていない。Aさんによれば、Fさんは販売職に就いたが辞めてしまったという。このように、若者就業支援施設が閉館してから

「集まり」は、自然消滅するかたちでなくなっていった。

たとえこの施設や「チャット」がなくなったとしても、互いに連絡をとり合って交流を持続させることは、彼らにとってそれほど困難なことではなかっただろうと考えられる。実際にBさんとCさんの就業先がいったん決まった際にも、BさんとCさんは終業後に連絡をとって「集まり」への参加を続けていた。にもかかわらず、彼らが「集まり」を継続していこうとしなかったのは、施設やそのイベントである「チャット」という制度的な後ろ楯がなくなってしまったことで、自分たちが仕事を探すことを目的とした集団であるという、「集まり」を継続していく理由を消失したためであると考えられる。このように、制度を介して自発的につくられた「集まり」は、制度的につくられた施設のイベントである「チャット」から自律していく一方で、制度的な後ろ楯が存在することによって初めて成立しうるものであるという意味で、制度に依存した脆弱なものでもあったのである。

6 考察・結論

本稿では、経済的には家族に依存して生活しながらも、家族以外の社会関係をほとんど持たない人たちの事例として、若者就業支援施設に長期間にわたって通い続ける男性たちが形成する自発的な集まりをとりあげ、その特性について明らかにしてきた。

「集まり」においては、求職活動に関する話題を積極的に避けること、特定のメンバーを排除してしまう可能性のある話題について慎重に回避することが規範化されていた。彼らの「集まり」におけるそうした配慮は、これまで様々

な集団において排除されてきた者たちである彼らが、自らをひとりの成員として処遇されるような集団を他に持たないことから、自分自身を排除されないようにするためのものであった。そして彼らは、正規雇用には就いていないという自分と同じ境遇にある人たちの集まりにおいて、他のメンバーたちとの差異をみいだすことで、ようやく自己を確保していた。けれども、制度を介して自発的につくられた「集まり」は、制度的につくられた施設のイベントである「チャット」から自律していく一方で、施設や「チャット」といった制度的な後ろ楯が存在することによって初めて成り立つことのできる、制度に依存した脆弱なものでもあった。彼らは、そのような制度に依存した仮初めで脆弱な集まりをつくりあげながら、「不安定就労」の状態における自己の保存・維持を試みているのである。

Zygmunt Baumanによれば、「急速に民営化され、個別化されるとともに、急激にグローバル化する世界のなかで」、個人が自己を確認できるような永続的な集団は「手に入らないもの」となってきており、その代わりに、人々は自らの差異や独自性によって自分だけで自らの存在を確認しようとするか、一時的な集団を求めようとするのである（Bauman 2001 = 2008: 26-7）。「集まり」のメンバーたちが自己を確認しようとする様式を、Baumanが示した一般的な様式と比較すると、一時的な集団を求めようとする点や差異をみいだそうとする点において類似しているといえよう。しかしながら、彼らが自己を確保するために必要とする仮初めの集いは、自分自身が排除されないようにするために、特定のメンバーを排除してしまう可能性のある話題について慎重に回避することが規範化されたものでなければならない。ま

た、彼らが差異をみいだすことができるのは、正規雇用には就いていないという同じ境遇におかれた人たちの集まりにおいてである。さらに、彼らはそうした集まりのなかで差異をみいだそうとすることから、自己を確保しようとする集団において共同性をみいだすことができないのである。このように、家族以外の社会関係をほとんど持たない若年不安定就労者たちは、自己を承認してくれるような一時的な集団をみつけることが非常に困難だけでなく、そうした集団をみつけることができたとしても、そこにおいて共同性をみいだすことができない状況におかれているのである。

注

¹ また、「パラサイト・シングル」には、非正規雇用や無職の若年者たちだけでなく、正規雇用には就いている人たちも含まれる。

² 本稿では、非正規雇用や無職の男性たちが自発的に形成する集まりについてふれるが、同様の女性たちが形成する集まりは、それと大きく異なるものとなることが想定される。この点については、別稿にて明らかにしたい。

³ 若者就業支援施設は、15歳から30歳代前半までの若年者たちを対象として設置されたが、現在では対象年齢が30歳代後半までに引き上げられている。本稿で事例として扱う施設では、30歳代前半までの若年者が対象とされていた。

⁴ そのため、若者就業支援施設は、若年者に職業紹介を行う公共職業安定所である「ヤングハローワーク」とは異なる。

⁵ これまでの「フリーター」「ニート」の定義において、一貫して既婚女性が除かれていたことから、「若年不安定就労問題」の主な対象とされてきたのは男性であったといえる。

⁶ この施設が開設された後、同じ建物の別のフロア

に他の若者就業支援施設が設置された。そのことは、この施設が閉鎖された理由と大きく関わっているものと考えられる。

⁷「チャット」の参加者の中で女性は5分の1程度であり、彼女たちは1回もしくは数回ほど参加するだけで、継続的に参加している女性参加者はみられない。

⁸表1の属性は、2008年3月現在のものである。「通い始めた時期」とは、「チャット」に通い始めた時期を指す。

⁹表1では、Dさんが「チャット」に「通い始めた時期」を、2005年11月と2006年8月と併記している。これは、Dさんが2005年11月に「チャット」に通い始めた後、まったく通わない時期をはさんで、2006年8月から再び通い始めたことを示している。

¹⁰ただし、Eさんへのインタビューは、Eさんの希望により、Aさん同席のうえで行った。

¹¹Aさんによれば、こうしたやりとり以前にも、「集まり」の参加者たちのあいだで「それぞれが履歴

書を書いてきて、互いに批評し合おう」ということになったものの、結局実現されることはなかったという。

¹²この部分の記述は、野宿者が『『俺』という主体を確保しようとするとき』、他の野宿者たちである『『あいつら』への埋没を恐れ、『あいつら』から距離を置こうと』する一方で、『『あいつら』という参照枠組みを必要としている』（西澤2010: 84-85）という西澤晃彦の指摘から示唆を得ている。

¹³「チャット」の運営スタッフは、30代、40代、60代の女性3名で構成されており、いずれも東京都内にあるNPO法人のメンバーである。彼女たちは、この施設が開設されていた2005年4月から2008年3月のあいだ、施設で行われるイベントの運営などを行っていた。この施設の運営には、「チャット」の運営スタッフのほか、数名の行政職員が携わっていた。

¹⁴運営スタッフたちは「チャット」について、「みんなで高めあって、はげましあって、元気になる場にして欲しい」と話していた。

文献

新谷周平, 2007, 「ストリートダンスと地元つながり——若者はなぜストリートにいるのか」本田由紀編『若者の労働と生活世界——彼らはどんな現実を生きているのか』大月書店, 221-52.

Bauman, Zygmunt, 2001, *Community: Seeking Safety in an Insecure World*, Cambridge: Polity Press. (= 2008, 奥井智之訳, 『コミュニティ——安全と自由の戦場』筑摩書房.)

橋口昌治, 2011, 『若者の労働運動——「働かせろ」と「働かないぞ」の社会学』生活書院.

本田由紀, 2002, 「ジェンダーからみたフリーター」小杉礼子編, 『自由の代償／フリーター——現代若者の就業意識と行動』日本労働研究機構, 149-74.

飯島裕子・ビッグイシュー基金, 2011, 『ルボ若者ホームレス』ちくま新書.

乾彰夫編, 2006, 『18歳の今を生きぬく——高卒1年目の選択』青木書店.

神野賢二, 2009, 「自転車メッセンジャーの労働世界」『労働社会学研究』10: 71-103.

小杉礼子, 2003, 『フリーターという生き方』勁草書房.

日本労働研究機構, 1991, 『平成3年版労働白書』.

——, 2000, 『調査研究報告書136 フリーターの意識と実態——97人へのヒアリング結果より』.

- 西澤晃彦, 2010, 『貧者の領域——誰が排除されているのか』河出書房新社.
- 社会経済生産性本部編, 2008, 『2007年度地域若者サポートステーション事例集』
- 戸室健作, 2009, 「請負労働の実態と請負労働者像——孤立化と地域ネットワーク」中西新太郎・高山智樹編, 『ノンエリート青年の社会空間——働くこと, 生きること, 「大人になる」ということ』大月書店, 227-68.
- 山田昌弘, 1999, 『パラサイト・シングルの時代』ちくま新書.
- 山根清宏, 2005, 「『引越屋』の労働世界——非正規雇用で働く若者の自己規定」『日本労働社会学会年報』15: 59-81.
- 湯浅誠, 2007, 『貧困襲来』山吹書店.

(にいた のりこ、首都大学東京大学院、blackcat@xg8.so-net.ne.jp)

(査読者、北川由紀彦、西澤晃彦)

Relationship Formation among Young Precarious Workers

A case study of spontaneous gatherings mediated

by a youth employment support center

NIITA, Noriko

This paper introduces a case study of spontaneous gatherings of young men formed through the mediation of a youth employment support center. In doing so, we clarify the experiential world of young precarious workers who have almost no other social relations and who depend on their parents financially in their daily lives. Few previous studies have focused on young people in this situation. None of the young men who participated in the gathering had other social groups where they were treated as regular members. As such, the implicit consent of unwritten rules was shared among them so no one would be excluded. In this gathering, in which none of the participants was in regular employment, as the young men discovered differences between themselves and others, they were finally able to construct a self-identity. Nevertheless, this was a temporary phenomenon that was abandoned when the center was closed. While forming a transient and fragile gathering that relied upon the support center, the young men were attempting to protect and maintain their self-identity within a state of “precarious employment.”